

第28号 華山会報

平成24年4月11日

財団法人華山会

絵がとり結ぶ華山と大蔵永常との縁

愛知大学文学部教授 有 蘭 正一郎



渡辺華山は家計を補うために、描画の技術を学んで、絵を描いたとされています。華山作「鷹見泉石像」（国宝、東京国立博物館蔵）「一掃百態図」（重要文化財、田原市博物館蔵）に描かれている人物は、素人の私が見ても、じつに表情豊かです。また、粉本を参考にして描く、山水画中の景観諸要素の選択と配置は見事です。絵は情報を伝える的確な手段であることを、華山は体得していたと思われます。

また、華山の推薦を得て三河田原藩で殖産興業に携わった大蔵永常は、予備知識を持たない人々へ伝えたい殖産技術の中で、文章では解り辛い要素を、絵に描いて世間へ発信したと、私は考えています。

華山は、永常が板行した冊子の挿絵を見て、「永常は殖産事業の実践と各地での見聞を積み重ねた人だ。その人が描いた絵だから、伝えたい技術の要素が、体験したことのない人でもわかるだろう」と判断して、永常に殖産興業の指導を依頼したように思われます。

華山と永常をとり結んだのは、情報を伝達する手段のひとつである絵だったと、私は思います。結果は、様々な要因が絡んで、永常が殖産方を勤めた五年の間に、二人が目指した所までは行きつけませんでした。二人の生涯を顧みるたびに、私は人の出会いには相通ずる縁が介在することを感じます。

さて、永常は田原藩領で実践してみたい殖産事業の内容を列挙した『門田の栄』に、水田で二毛作をおこなう技術と手順を絵入りで記述していますが、領内の農民たちは受け入れなかったようで、後年板行した『広益国産考』では、三河(田原藩領)の農民の固陋さを非難しています。

しかし、私は、三河の農民たちが固陋だったからではなく、当時の三河には永常が奨励する技術を受け入れる諸条件が整っていなかったからだと考えます。三河(田原藩領)の農民たちは、「土地相応」「分を知る」視点から、「水田はイネを作る場だ」と位置付けていたようです。三河における当時の技術水準をモノサシにすれば、農民の判断のほうが適切だったと、私は考えます。これが近世の農耕技術の地域性を明らかにする作業を四十年近くおこなってきた私の、永常と三河の農民たちとの行き違いに対する解釈です。

ちなみに、永常が板行した冊子中の絵の中には、男が家屋の中で仕事をしながら、煙管を口にくわえている絵が多数あります。しかし、はたして手で支えることなく、煙管をくわえたまま作業を続けることができるか。永常は煙草好きで、無意識のうち煙管をくわえている男を絵に描いたのか、煙草は殖産興業品目のひとつなので、作って加工すれば所得が増えることを、読者へ暗示するために、意識して煙管をくわえる姿を描いたのか。面白い構図だと思います。

他方、華山が描いた絵の中には、煙管をくわえた人物はいないように思います。華山はタバコを吸わなかったのか。「そんな構図はあり得ない」と思っていたのか。真面目な官僚の華山と、世間をやや斜めから見る殖産指導者永常の、性格と立場が垣間見えるような気がします。

郷土の歴史と

渡辺華山との関わり

田原市教育委員会委員長

神谷康元

幕府に対する反逆罪を問われ投獄されたことや、報民倉をつくり天保の飢饉の際に田原藩では一人の餓死者も出さなかったという程度の認識しか持つてはいませんでした。

言い訳になりますが、私は、記憶に自信がなかったこともあり、あまり歴史が得意な方ではありませんでした。ところが、最近になって歴史の面白さに目覚めてしまい、古文書を読む会にも参加するようになりましたが、地元で古文書の中にもかの渡辺華山の名前が出てくるわけです。一部を紹介してみたいと思います。

今回、華山会報の原稿を書いてほしいとの依頼を受けて、渡辺華山についてあらためてふり返ってみると、私が渡辺華山という名前に触れたのは、かれこれ今から四十年ほど以前になりますが、小学校の学芸会でした。そこでは「華山劇・板橋の別れ」が毎年の「とり」になっていました。私が卒業したのは、田原市立高松小学校ですから何故？と思われる方もいらっしゃると思いますが、私自身何故なのかはわかりませんでした。当時、華山の役は五年生の男子と決まっております、花形でしたから誰が役に付くのかはときの話題になっていました。しかし、当時の私たちには、渡辺華山がどんな人なのかはよく知りませんでした。それ以降でも、学校の日本史の授業の幕末のところで習ったなあという程度でした。

郷土の偉人という認識もあまりなく、蛮社の獄の際に、『慎機論』を著していたため、高野長英らと共に

高松・大草沖で紀州藩の御用船が難破した際に、流れ着いた積荷を横領して、荷主側に賠償を求められて現在の民事訴訟に庄屋さんや村の代表として江戸に呼び出され、多額の賠償を求められた記録があります。その際に、領民の苦難の軽減のために大変な尽力をしたことや、当時田原市の太平洋沿岸にかの黒船が姿を見せたことがあったため、海岸防備の目的で遠見番所というものが赤羽根海岸に設けられており、高松一色の山と加治を中継し、田原のお城とをのろしで連絡を取っていたようですが、華山先生は生涯で四回、

百二十日しか国元・田原には来ないのだそうですが（蟄居中をのぞく）、その短期間に高松一色の富士見茶屋に立ち寄り、遠見番所を視察し、和地の医福寺へ宿泊して、伊良湖・神島へも足を延ばした記録が『参海雑志』に残っています。その時に書いた写生画も残されています。江戸より来たらやはり公務だけでなく素晴らしい景色を見ながら絵を描きながらの散策もされたのかと思われれます。（江戸にいる時にも時々写生の小旅行にでかけていたそうですから）また、助郷という賦役が幕府より出された折に、働き手を取られてしまい、生活が立ち行かなくなるとの心配で免除を願い出た記録がありますが、その折も何とか免除してもらえようと随分の働きをしてくださった記録が残っているそうです。

題字「華山会報」元華山会理事 故小澤耕一氏	P ①
絵がとり結ぶ華山と大蔵 永常との縁 有園正一郎	P ②
郷土の歴史と渡辺華山との関わり 神谷康元 目次	P ③
画家渡辺華山の心象 『馬図』（絵馬）	P ④
渡辺華山『毛武遊記』	P ⑤
博物館収蔵品から 渡辺華山筆	P ⑧
『客坐掌記（天保九年）』	P ⑩
平成二十三年度華山・ 史学研究会研修視察 小関三英の生誕地 鶴岡・酒田の旅	P ⑬
博物館企画展のご案内 華山の田原行（十二）	P ⑭
財団法人華山会 からご案内 田原市博物館	P ⑯

画家渡辺華山の心象

重要文化財 馬図（絵馬）
 天保十二年（一八四一）
 板面墨画 絵馬型額装
 縦三七・〇cm×横六七・三cm

板面裏書によれば、「奉納 願主
 山田甚左衛門・同重五郎・同重左衛
 門・同六治郎・同安右衛門・同久右
 衛門・小林傳右衛門」と片浜村の七
 人が願主となり、片浜観音堂に奉納
 したものである。

片浜観音堂は文化八年（一八一二）
 に建立された。片浜村の小林庄助が
 西国三十三観音（現在の和歌山・大
 坂・奈良・京都・滋賀・兵庫・岐
 阜）巡拝の際、勧請され、本尊は十
 一面観世音菩薩である。天保十年
 （二八三九）三十三観音像、弘法大
 師像、地藏菩薩庚申等を安置した。
 観音堂の敷地内には、天保十一年五
 月の銘が記される田原藩第十一代藩

主の三宅康直寄進の灯笼一基が現存
 する。本堂は、昭和五年（一九三〇）
 と平成時代に入ってから二回、建
 て替えられている。

奉納願主名以外に、「天保十二年載
 丑花月吉辰 諸願成就」「田原御城
 内 渡邊登様筆」「大工御城内鈴木



四郎兵衛様」とあり、天保十二年三
 月に華山に依頼したものと考えられ
 る。やはり立つ馬が左右二本の杭に
 繋がれ、後ろ足をまさに蹴り上げよ
 うとする様を描く。あたかも田原蟄
 居中の華山自身の心境を表している
 ようである。この構図は両杭繋ぎ馬

と呼ばれるもので、平将門が反乱を
 起こした時に神から黒馬を賜ったと
 いう故事に基づき、平将門や将門の
 子孫である相馬家が戦の陣幕や家紋
 に用いている。国指定の重要無形民
 俗文化財となっている福島県の相馬
 の野馬追いは有名である。平将門を
 祀る築土神社は、現在の千代田区九
 段北にあり、江戸にいた華山も見る
 ことができたであろう。また、つな
 がれた馬を描くことは、馬の動きを
 封じ、人の願いを聞くようになる
 ことに通じるとも言われる。

材質は、桐材で、絵馬額に仕立て
 られている。馬の後ろ足下に「華山
 戲墨」の朱文長方印が捺されるが、
 重要文化財に指定される印とは異な
 り、文字が太く感じられる。華山の
 板画は、類例が少なく、華山晩年の
 作であることが裏書きで特定でき、
 地元に残る珍しい作例と言える。

田原市博物館学芸員 鈴木利昌

渡辺崋山『毛武遊記』⑤

研究会員 加藤克己

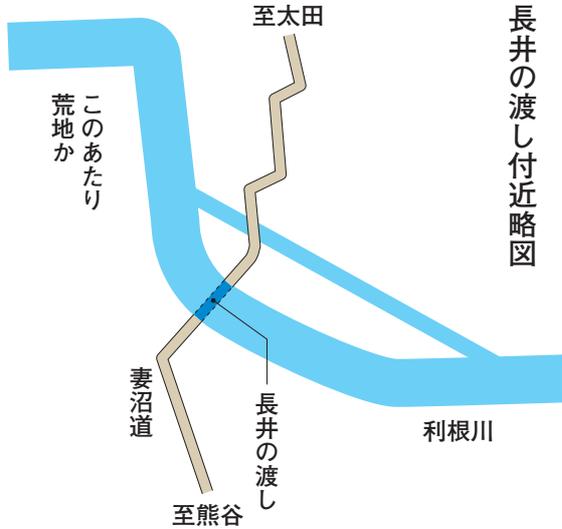
川原にいづ。これハ利刀川とて川原いとひろし。此川の左だり荒れて、野となれしところ二三町ばかり。川越れば上毛なり。

(天保二年(一八三二)十月十二日)

川原に出る。これは利根川といって、川原がたいへん広い。この川の左は荒れて、野となつてしまつた所が二、三町ばかりある。川を越えれば上毛(上野国、群馬県)である。

※ 川の左だり 右岸なのか左岸なのか? 妻沼と

長井の渡し付近略図



(利根川図)



古戸の間に利根川の渡船場(「長井の渡し」とも「古戸の渡し」ともいう)があった。その付近では当時は利根川が北から南へ流れていたのので、川を渡る前に川の左(右岸)に荒地が見えたのではないだろうか。

※ 二三町 「町」は面積をあらわす場合と距離をあらわす場合があるが、ここでは面積と考えて二、三ヘクタールくらいか。

一里、太田といふ処にいたり、又飲す。鯛の切身、あつものなり。風いよいよよはげしく。此あたり常州より魚来。冬ハ鯛、ひらめ、

あはび、たこ。
かごかくおのこ、此風はげしきをもて、価をつぐのひかえらんといふ。聞かず。太田ハ令幣使道をもて、此駅にとゞめんとするなり。

一里(約四km)。実際は利根川を渡つてから約六km。熊谷宿と太田宿のほぼ中間点に妻沼がある(行くと)、太田という所に至り、また飲む。(肴は)鯛の切り身、熱い吸い物である。風がいよいよ激しくなつた。

このあたりは常陸国(茨城県)から魚が来る。冬は鯛、ひらめ、あわび、たこ。

駕籠かきの男は、この風の激しいことをもつて、(ここでやめて)報酬を得て帰りたいという。(私は)聞かない。(駕籠かきの男は)太田は例幣使街道(の宿駅)であることをもつて、この駅に(私を)とどめようとするのである。

※ 太田 第一回(24号)参照。

※ 令幣使道 例幣使街道。毎年、朝廷の使いが日光東照宮に進物をささげるために通る下向路(帰路は江戸経由、日光道中、東海道を通る)。中山道倉賀野宿(群馬県高崎市倉賀野町)から日光道中今市宿(栃木県今市市)に至る、上野国と日光を結ぶ街道。

新田金山に出る。此山むかし新田義貞城ありし処とて、山ハ高からざれども、名ハいと高う聞ゆ。又万葉にも見えし山なれば、もとより靈山にありしや。万葉(以下二行ほど空字)



新田の金山に出る。この山は、昔、新田義貞の城があった所ということで、山は高くはないけれども、名はたいへん高く聞こえる。また、『万葉集』にもみえる山なので、昔から神聖な山であったことであろう。万葉（以下空字）

新田金山（写真）
東側から写す。

※ 新田金山 太田市金山。足尾山地が渡良瀬川で寸断された独立山。標高二二二m。

※ 新田義貞城ありし 新田義貞は、元弘三年（一二三三）生品神社で挙兵後、各地を転戦し、一度も郷里へ帰っていない。金山に築城した記録はないし、近年の発掘でも当時の遺構は見当たらない。金山城は、文明元年（一四六九）に岩松家純が築城したのであるが、いつしか新田義貞に結びつけられたのである。う。明治になって、義貞を祭神とする新田神社が本丸跡に創建された。

※ 万葉にも見えし 第一回（24号）参照。
※（以下空字）『万葉集』に載っている歌を書くつもりであったのだろう。

皆松ばかりにて、日暮、いとさびし。風ハおどろくしく吹て、加籠をものりはなし、ひとりたどり来る。かごかくおのこも弥助も梧庵も、あとたどり来ぬらん、かげだに見えず。漸、丸山といふに到、かな山につきたる山にて万葉にも見えしとぞ。

（まわりは）皆松ばかりであって、日が暮れて、たいへんさびしい。風は恐ろしく激しく吹いて、（私は）駕籠を乗り捨てて、ひとりで道を探しながら進んだ。駕籠かきの男も弥助も梧庵も、あとをたどって来るであろうが、影さえ見えない。ようやく、丸山という所に至る。金山に続いている山であって、『万葉集』にも見えるという。
※ 皆松ばかり 桐生へ行く道は、金山の東麓

を通っている。明治の地形図では道沿いは水田と桑畑が多いが、華山が通った頃は松林だったのであろう。

※ 丸山 上野国山田郡丸山村（太田市丸山）。金山城の東北にあたり、古代の新田駅から足利駅へ向かう旧東山道と推定される道と桐生道とが交わる交通の要地。慶長十一年（一六〇六）北隣の吉沢村（太田市吉沢町）から住民を移して宿駅を立てたといわれる。地名の由来は、丸山宿西方のほぼ円錐形の孤立山「丸山」による。

此山辺にうどん売家あり。岩本氏の紋つけたる提燈をひさしのもとに高うつなきて、吾到をまつ。到れば甥喜太郎、出入の左官助次郎、むかし岩本のこものして今家もちたる喜八、三たり、待わびて帰りもやせんと躊躇せし処にいたりしかば、いとよるこびによるこびて、持来りし酒を開き行厨をときて旅の労をなぐさむ。梧庵僕従追ひ来、これよりかごに喜太郎をのせ、さきへやる。喜八、助次郎に導をなさしめ、戌の半過る頃、桐生の町に入る。この入らんとする手前に川あり、渡瀬川といふ。

この山のほとりにうどんを売る家がある。岩本氏の紋をつけた提燈をひさしのもとに高くつないで、私の到着するのを待っていた。そこへ行くと、甥の喜太郎、出入りしている左官助次郎、昔岩本の使用人をして今は家を持っている喜八の三人が、（私が）待ちわびて帰ったのではないかと

躊躇しているところへ（私が）至ったので、たいへん喜びに喜んで、持ってきていた酒をあけて行厨（弁当）を開いて旅の疲れをなぐさめた。梧庵と下僕が追って来た。ここから、駕籠に喜太郎を乗せて、先に行かせた。喜八、助次郎に先導させ、戌の半（午後九時）を過ぎる頃、桐生の町に入った。この入ろうとする手前に川がある。渡良瀬川という。

※ 甥喜太郎 岩本一僊。華山の妹茂登の子。画道に造詣があった。

※ 梧庵僕従追ひ来 駕籠かきの男も来たであろう。

※ 渡瀬川 渡良瀬川。利根川の支流。足尾山地に源を発し、群馬県・栃馬県・茨城県・埼玉県を流れ、埼玉県北葛飾郡栗橋町で利根川に合流する。総流長一〇九km。

渡を松原の渡しといふ。三ツ堀、境井野、小屋原、常木等凡一里弱、桐生の町に入。岩本茂兵衛ハ我姻家なれば、主とせんとて先へ甥の喜太郎年十二、我が駕にのらしめて案内せしかば、やがて街の中程迄そのは、と、もに迎ひ出て、懇にもてなす。その妻は我妹にて侍れば、よろこびかぎりなし。この岩本氏はこの地の農夫なれど、半ば絹商ひて世を送るま、貧しからず、こもの多く使ひて、何くれの事こゝろのま、なれば、我たびこゝろも安し。

（四頁空白）
渡しを松原の渡しという。三ツ堀、境井野、小

屋原、常木など（を通り）およそ一里弱（四km弱）で桐生の町に入る。岩本茂兵衛は私の姻戚の家であるので、主としようとして、先へ甥の喜太郎（年十二歳）を私の駕籠に乗らせて案内させたので、やがて街の中程までその母親（茂登の姑幸）といっしょに迎えに出て、懇ろにもてなしてくれました。その（茂兵衛の）妻は私の妹であるので、喜びは限りないものである。この岩本氏はこの土地の農夫であるけれど、半分は絹の商売で生計をたてているので、貧しくない。使用人を大勢使っていて、あれやこれやの事が心のままになるので、私の旅心も安泰である。

（四頁空白）

※ 松原の渡し 上野国山田郡境野村三ツ堀（桐生市境野町）と同郡下広沢村松原（桐生市広沢町）の間を結ぶ、渡良瀬川筋の渡し。

※ 三ツ堀 上野国山田郡境野村三ツ堀（桐生市境野町）。

※ 境井野 上野国山田郡境野村（桐生市境野町）。

※ 小屋原 正しくは小谷原。上野国山田郡新宿村小谷原（桐生市浜松町）。

※ 常木 上野国山田郡今泉村常木地区（桐生市本町六丁目―仲町三丁目あたり。常祇稻荷神社近辺）。

※ 一里弱 松原の渡しを渡ってから四km弱で正しい。

家に到し時は亥刻すぎる。湯浴などして、酒、吸ものふたつ、鯛のやきもの、すゞり蓋、鉢肴等くさくさのもの、いだしもてなす。津久

井松宅といえる医人が妻は斎藤式右衛門が姉にて、今ハ夫におくれいとはかなき事たるべし。我いたりしをよろこび、此夜走りいたり、四方山のものがたりに時移りて鶏鳴におよぶ。

家に着いた時は亥の刻（午後十時）を過ぎていた。湯浴みなどをして、酒、吸い物二つ、鯛の焼き物、すずり蓋（広蓋に口取り肴などを盛ったもの）、鉢肴等、いろいろなものを出してもてなしてくれた。津久井松宅という医者の妻は、斎藤式右衛門の姉であって、今は夫に先立たれたたいへんむなしいことであろう。私が（桐生へ）至ったことを喜び、この夜走ってきて、いろいろな話をして時が移り、早朝に及んだ。

鴻巣	吹上	久下	熊谷	妻沼 （利根川・ 長井の渡し）	太田	丸山	渡良瀬川 （松原の渡し）	桐生
← 7.3	← 7.1	← 約9	← 約9	← 約9	← 約6	← 約6	← 約4	

鴻巣-熊谷間はJR高崎線の駅間距離、熊谷-桐生間は妻沼道・桐生道を地図で測定 単位km

合計48km強か

※ 津久井松宅 桐生新町の医者。二代目松宅

(雨亭)。天保二年(一八三一)没。

※ 齋藤式右衛門 江戸詰め、田原藩士、目付役

兼勝手吟味役。華山側近の一人。字は善以、

初め鶴太、次いで栄太、斎宮とも称した。姉

のぶが津久井家に嫁いだ。文政五年(一八二

二)、父の忌明けとともに家督、高二十八俵

二人扶持を相続した。次第に出世し、嘉永四

年(一八五二)、四十俵高五俵役料となった。

※ 医人が妻……此夜走りいたり 津久井松宅の

妻がやって来たことは十三日にもほぼ同様の

記事がある。華山は十二日の夜遅く到着した

のであるから、それを聞きつけて駆けつける

としたら、十二日にやってくることに無理

があると思う。十三日に来たのであろう。

十三日 晴

この日はもていたりし土産を出し、岩本が母の住居に持出てそここ、と分けくばる。この母ミづからふくさ、風呂敷、紙の類と、のひ置いて補ふ。四方山のはなしに日暮る。

十三日 晴

この日は、持って来ていた土産を出して、岩本の母の住居に持ち出して、あちこちに分けて配る。この母がみずからふくさ(進物を包む絹製の布、絹布の風呂敷)、風呂敷、紙の類を整え置いて補った。さまざまな話に日が暮れた。

左官助次郎酒一升持ち来。この妻ハ岩本二仕

えしものにて今かく出入する。妻の名ハもよ。

左官助次郎が酒一升持って来た。この妻は岩本に仕えていたもので、今このように入出入りする。妻の名は「もよ」という。

お歌酒一升携え来る。これハむかしの名ハまつといひて、神谷左内どのに仕えて予を相しれバ、岩本にても常にこゝろ安くせしかバ、かくハ懇なるなり。この女ハ沼津の人にて逆旅なりけるが、不幸にて此地にたゞよひあそべるなり。右たち糸とりてなりわひとす。

「お歌」が酒一升携えて来た。これは昔の名は「まつ」といって、神谷左内殿に仕えていて、私と互いに知り合いなので、岩本の家とも常に心安くしているのです、このように親しくするのである。この女は沼津(東海道宿駅、静岡県沼津市)の人であつて、宿屋であつたのだが、不幸があつてこの地にさまよい来たのである。そして、たち糸とり(織物製造の準備工程で紡いだ糸を繰る作業)をして生計をたてている。

※ 神谷左内 神谷与次右衛門左内。旗本二千石。中奥御番、三番町住。

訂正

第一回(24号) 天保二年の西暦が間違つていました。「一八三一年」が正しいです。

前回(27号) 「日光・赤城・三国の峰々」の「三国」について、御指摘をいただきました。単体の「三国山」ではなく、「三国連山」と考えるべきだと。それならば、浅間山の右奥に見える。季節が冬だから、白銀をかぶって印象的だったたろうということですが。

山々の位置関係



(続)

田原市博物館収蔵品から 渡辺崋山筆『客坐掌記(天保九年)』◎



五百万人トス、其一部子ケルスニ属ス、多、奥地ニ
 住居せると見ゆ、コレヲ「エダハンス」とも云、「ヒヤシヨウス」、
 又ハイタールス、又ハタヤッケルスとも名ク、此数多カラス、
 而シテ甚不闘シテ、作業ヲ不為、誠ニ暴戾、
 奇妙ナル事ヲ用ユ、たとえ、婿ガ婚礼ヲスル為メニ
 数人ノ首ヲ嫁ノ足下に拜伏せしめル也、其ヲ得る為ニ
 婿、親類共ト林ニ隠レテ居、能キ旅人ヲ襲ふ、殺也、
 其首ヲ新嫁ノ家ニサラス、コレデ人首ヲカサリタル
 村ハ可懼様子ヲ保ツ、但シコレニテ隣境ノ者ト、戦
 争不絶、コノ故ニ人民ノ蛮息に大ニサマタケラ

為ス也。奥地ニ居スルモノハ、アレホレセント云種類、是ハ
 色黒クシテ、タヤッケルスヨリ耳少シ長シ、海岸ニ多住
 居スルモノハ、近島ノ極卑シキ者ノ集リ也、即チ
 マレイス、爪哇人、食耳ヘス人、并ニ支那人。
 此支那人力尽ク交易ヲ支配ス。其性親シミナク、
 義ニ戻リテ、欧羅巴人、奥地ヲ知んと欲而、次第ノ二
 心ヲ用ラレ共、サマタケを為ス。此島の知テ居る所ニハ、
 ホルヲラ国、バンイーラマツシンク、シユカダナ、ランタツク
 ヘルマツタ」サンバス等也、子ーデルランド人カ、ベンヤミツシンク

子ケルスニ Negro, ニグロ、黒色人種。

エダハンス 未詳。

ヒヤシヨウス 未詳。

イタールス 未詳。

タヤッケルス ダヤク族、第27号8頁参照。

不闘 ひらかず

可懼 おそるべき

アレホレセント 未詳。

タヤッケルス ダヤク族 第27号8頁参照。

マレイス Malays, (Malay) マレー半島を中心に
して、その周辺に住む民族。

爪哇 ジャワ Java

食耳ヘス 食力自私、Celebes, セレベス、スラウエシ。

ヘルマツタ 未詳。



*シルタント 胡椒交易ニ一種コンタテクトを為テ、
 其国ノ南隅ヲバナヲウ及タチスノ二所ヲ領セリ。
 而シテ又、前カタ、バンタム^{*}のシルタタンに属セシユウア
 タナ、ランタックノ首長ト交を為ス、然ナガラ、千
 七百一十八年ニ於テ、其所ヲ全ク押領シテ、子デルラント
 人ニソムキタリ、歐邏巴諸国君長、此島に人
 民ヲ安スル事ヲ不堪勤む、但無功也、海賊
 各所ニテ多大の商買ヲ害ス、ホル子ヲハ
 北西海ヨリシテ五里程ヘタツ大河側ニアリ、此河、夥
 船不堪、コレハシコタンノ住居シテ、凡家数三千戸、
 ソレカ「フロツテン」ノ上ニ普請スル河岸ニアリ。
 土民、黄金、真珠、鳥巢、其他国産ものヲ以テ
 交易ヲ為ス、支那人多々住シテ三百ト^{*}ノ
 船送ル、

シルタント Sultan, 回教君主。
 コンタテクト c (K) ontrac (K) r, か、契約、約定。
 タバナヲウ 未詳。
 タチス 未詳。
 バンタム Batam, バンテンBantenの旧称、ジャワ
 島西部、スンダ海峡に面した港。
 押領 他人の領地などを実力で奪うこと。
 シコタン スカダナ
 フロツテン 水上住宅、フロット(蘭) vor, (英)
 float, (独) flaten,
 鳥巢 海燕の巢 燕窩 中国料理で珍重する。
 トン 樽、ton, 噸。

平成二十三年度華山・史学研究会研修視察
小関三英の生誕地―鶴岡・酒田の旅

平成二十三年度華山・史学研究会研修視察は、十月二十一日から二十三日、金曜日から日曜日にかけての二泊三日で行われました。毎年一泊二日かほとんどですが、今回は愛知県から山形県の日本海側までの行程でしたので、二泊することになりました。

山形県鶴岡市は江戸時代には、鶴岡藩(庄内藩)の城下町として栄えた、渡辺華山の蘭学研究仲間であった小関三英(一七八七―一八三九)の生誕地です。二人の交流・活躍の場は江戸でしたが、武士の出身地には、研究資料がまとめられている場合も多く、平成七年度に開催された博物館秋の企画展「日本の夜明け展―華山とその同志」には、鶴岡市郷土資料館から小関三英書簡などを出品していたこともあります。また、酒田市は田原藩成章館で儒学を教え、田原の地で没した伊藤鳳山(一八〇六―一八七〇)の出身地です。田原市博物館では、開館二年目の「田原藩と三山展」で取り上げ、いずれも渡辺華山と交流のあった人物の出身地です。

一日目、午前七時豊橋駅出発のひかり号に乗車

した会員は、山田哲夫・別所興一・加藤克己・中神昌秀・柴田雅芳・鈴木利昌の六名での出発となりました。東京に八時四十分着、九時十二分東京発の上越新幹線に乗り換え、十時四十九分新潟着、十時五十八分新潟発の特急いなほ号で山形県酒田市へ向かいました。八百キロメートルを超える長旅です。酒田駅に降り立ったのは、午後一時過ぎでした。都合六時間の電車旅でした。まずは、酒田駅前で昼食の情報収集をすると、日本海に浮かぶ飛鳥への定期航路が運行されている酒田港の旅客ターミナル内にあるさかた海鮮市場がお勧めとの情報を得ました。早速、タクシーで移動し、まずは二階にある食堂「海鮮どんや とびしま」で腹ごしらえです。地元でもお得な食事場所として有名なのか、多くのお客様でにぎわっていました。既にお昼のおすすめ定食のいくつかは品切状態です。それでも、値段も安く、とってもお得でした。酒田で入手した「酒田観光ガイドブック」を見て、市内をどのように回ろうかと思案していたところ、無料観光自転車の案内が目につき、尋ねたところ、人数分の自転車を借用できました。酒田市内での最終目的地は酒田駅近くの本間美術館と決めていたので、返却が酒田駅の観光案内所で可能です。市中心部の観光には、とても便利です。まずは、山居倉庫(庄内米歴史資料館)に向かいます。

山居倉庫は明治二十六年(一八九三)に建設された米の保管倉庫で、現在も農業倉庫として使用されています。倉庫裏側のケヤキ並木はテレビドラマや映画撮影によく使用されているおなじみの場所です。



次に向かったのは、明治初めまであった酒田町奉行所跡。冠木門が復元され、敷地内には往時をしのばせる建物模型が復元されていました。直角に曲がった石畳を進むと、突き当たりが本間家旧本邸。この屋敷は、本間家三代光丘(みつおか)が明和五年(一七六八)、庄内藩主酒井家のため、幕府の巡見使宿舎として建造、献上され、その後本間家が拝領し、武家屋敷と商家造りの二つの建

築様式が一体となっている珍しいもので、入場すると、説明がしてもらえます。本間家では、武家屋敷側は普段は使用せず、商家の方で暮らしていたそうです。代々使用された古代燵なども展示されています。明治時代には公民館としても使用されていました。道の向かいにはお店があり、本間家の店で使用した資料やいろいろな観光土産の販売品も置いてありました。酒田市内最後の見字場所は本間美術館です。市中心部の通りを北上すると約十分で本間美術館を囲む塀が見えてきます。



本間美術館では、阿部誠司学芸員の案内で、展示「雪・月・花の美」を拝見。本間家旧別荘となる本館清遠閣は、文化十年（一八一三）に本間家四代光道が失業対策事業として建てたもので、藩主酒井侯が領内巡視の際、たびたび訪ねて来たところでした。茶室を備え、明治末頃、一部二階建てに改装、大正十四年（一九二五）には東宮殿下（後の昭和天皇）が宿泊され、酒田の迎賓館として使用されました。ケヤキで作られた階段を上すると、二階には大正時代そのままのガラス窓やシヤンデリアを見ることができます。本間美術館敷地内の鶴舞園（かくぶえん）は鳥海山を借景にし、御影石の石灯籠の穴からのぞくとそこに鳥海山を見られました。今年一月に国の名勝に指定されました。夕暮れがせまり、酒田駅から羽越本線で二十七キロ強を鶴岡駅まで戻り、本日の宿、駅前の鶴岡ワシントンホテルにチェックインし、その後、駅近くで夕食を取り、この日は予定終了です。

第二日目は、ホテルからタクシーで、まず鶴岡公園（鶴ヶ丘城址）へ移動し、午後に資料閲覧をお願いしてある鶴岡市立郷土資料館（市立図書館内）の位置を確認後、文化二年（一八〇五）に創設された庄内藩校の国指定史跡旧致道館跡へ徒歩で向かいます。敷地内に入ると、入り口に近い聖堂では、孔子像の掛軸がケース内で出迎えてくれ

ました。致道館建物は東北地方に現存する唯一の藩校建築物とのこと。展示ケース内には、藩校で使用された書物などを見ながら進むと、田原市博物館で所蔵する重要文化財渡辺華山関係資料の中に入っている『一掃百態図』の複製（おそらく明治時代に渡辺小華が復刻したもの）が展示されています。

戻りながら途中にある大宝館と藤沢周平記念館にも寄ります。大宝館は、大正天皇即位を記念して、大正四年（一九一五）にバロック様式を模して建てられた擬洋風建築、木造二階建てで、鶴岡出身者や市に縁のある人物、文豪高山樗牛（一八七一～一九〇二）の生家や小説家横光利一（一八九八～一九四七）・作曲家中田喜直（一九二三～二〇〇〇）らの資料を紹介しています。建物も鶴岡市指定有形文化財にもなっています。大宝館のすぐ奥には平成二十二年に開館したばかりの鶴岡市立藤沢周平記念館があります。藤沢周平（一九二七～一九九七）は鶴岡に生まれ、山形師範学校で学び、教職にも就きましたが、結核を発病。その後、東京で記者生活をしながら、昭和三十九年（一九六四）から小説誌に投稿をはじめ、同四十八年に直木賞を受賞し、執筆活動に専念。微緑の武士や江戸下町の人々を主人公にした歴史小説が人気で、近年は藤沢作品の映画化が多くされ、人

気スポットとなり、新しい文学館として作品世界と作家の生涯を展示しています。鶴岡公園内では秋のイベントとして「にぎわい市」が開催され、テントが設置され、太鼓演奏が催されました。次に見学したのは、致道博物館で、敷地内には、国指定重要文化財で、洋風建築の旧西田川郡役所や文政五年（一八二二）建築の渋谷家住宅、第十一代藩主酒井忠発の隠居所として建てられた庄内藩主御隠殿、田麦侯の多層民家、庄内地方の民具バンドリ・仕事着・くりもの（重要有形文化財に指定）などが收藏されている収蔵庫や国指定名勝の酒井氏庭園（鶴岡城三の丸にあたる）も見られます。建物内では、西郷隆盛やドイツ留学した旧藩主忠篤・忠宝の資料を展示しています。



昼食後、今回の主目的である鶴岡市立郷土資料館を訪ねます。資料館には、郷土資料として「阿部正己（一八七九～一九四六）文庫」があり、田原に関連する人物として、伊藤鳳山（一八〇六～一八七〇）・小関三英（一七八七～一八三九）の資料が所蔵されています。岩波書店が刊行する『国書総目録』の伊藤鳳山の項には、自筆本の多くが資料館にあり、今回の調査では、阿部正己作成の年譜と「鳳山遺稿〔集成〕」を閲覧しました。資料館所蔵の鳳山自筆稿本は五十五種類にのぼります（鶴岡市郷土資料館作成伊藤鳳山自筆稿本目録による）。「鳳山遺稿」は元治元年（一八六四）から慶応四年（一八六八、明治元年の年）の年記があり、罫線引きの用紙に阿部が書き写したものと考えられ、難解な漢詩が多く残る鳳山の参考資料です。

小関三英の資料として、「小関三英伝資料」「小関三英年譜」「小関三英関係」「小関三英書簡」「荒井比古一氏旧蔵小関三英書簡解説書」などがあります。小関三英書簡は文政六年（一八一三）十月から天保九年（一八三八）十一月十日までのもので、仙台藩に勤務していた時代から亡くなる前年までにあたり、実兄仁一郎宛が多い。資料の詳細については、別に紹介したいと思います。

小関三英の父は庄内藩の足軽組の組外に属し、

暮らした屋敷は高畑町（現上畑町）と伝記で紹介されていますが、資料館の今野光男主査と秋保良氏からその屋敷の位置がだいたいわかるとの情報があり、地図に印をつけてもらい、ホテルへの帰途、タクシーで向かいましたが、資料館を引き上げたのが夕方で暗くなり、こちらあたりと付近を撮影したのみで引き上げました。夕食はホテル近くの和洋創作料理のべんけいで鶴岡の味を堪能しました。翌朝、小雨が降る中、再度現地踏査を試み、撮影した写真を掲載します。



鶴岡駅から新潟・東京経由で岐路へと向かいました。

研究会員 鈴木利昌

田原市博物館企画展の
ご案内

八月十一日(土)～九月二十三日(日)

夏の企画展

出光美術館コレクション

ヨンによる花鳥の美く珠玉の日本・

東洋美術

花や鳥たちが描かれた楽園は、キラキラとして眩い別世界です。これはどの国のどの時代においても愛されてきた主題であり、わが国でも古くから文学や美術の中で吉慶の印として広く用いられてきました。彩り豊かに咲く花に、優美さをそえる鳥たちの姿、そして花や鳥たちが自然と戯れる景色が、絵画や工芸の意匠にあらわされると、心地よい不思議な空間が生まれます。本展では「花鳥」をテーマに、日本・中国の書画工芸の優品を特集し、華麗で普遍的な美の魅力に迫ります。

(テーマⅣ)「幻想世界に迎えられた鳥たち」より

重要美術品

金欄手孔雀文共蓋仙

蓋瓶(きんらんんでくじやくもんともぶたせんさんびん) 景德鎮窯

中国・明 嘉靖時代 一口

幻の鳥、鳳凰を表現するにあたり、一部の特徴には孔雀が参照されている。そのためか鳳凰の代わりに孔雀を主たるモチーフとして牡丹唐草文を組み合わせた文様があるようだ。この作品は金欄手の仙蓋瓶で、いわゆる水注として用いられたもの。胴部に桃形の窓をつくり、その中へ金彩で雌雄の孔雀を描き、背景には牡丹文を配している。窓の外側には蓮弁や牡丹花などの文様を丁寧に描いている。



(テーマⅠ)「花鳥が出逢う水辺」より

伝雪舟等楊筆四季花鳥図屏風

室町時代 六曲一隻

室町時代の画僧・雪舟等楊(一四二〇～一五〇六?)は、中国・明時代の呂紀(りよき)の画などを参考にしている。今日、雪舟筆と伝えられる屏風は十数点にのぼる。それらは、水辺に遊ぶ鶴や鷺、鋭く枝を屈折させた松や、直立する竹、大きな花を咲かせた牡丹や蓮など、おおよそその構成要素を通わせている。ただ、作風は必ずしも一様ではなく、それぞれに異なる魅力がある。どの画を雪舟の真筆と判断するかはむづかしい問題だ。

この作品では、細い幹と枝を控えめに伸ばす松や竹が抑揚をつけない線であらわされる。松の幹や岩も、おおよそ荒々しい絵肌を表現してはいない。中空から舞い降りる鷺は、輪郭の外に淡墨が塗られることよって浮彫にされている。また淡い彩色による牡丹と蓮花も、この画の瀟洒な印象を引き立てる。



8月11日(土)午前11時から(開会式後) 出光美術館学芸員による
展示解説

8月26日(日)午後1時30分から

当館学芸員による展示解説

9月9日(日)午後1時30分から

出光美術館学芸員による展示解説

観覧料

一般五〇〇円

(二十人以上の団体は四〇〇円)

企画展開催時は小・中学生無料

華山の田原行（十二）

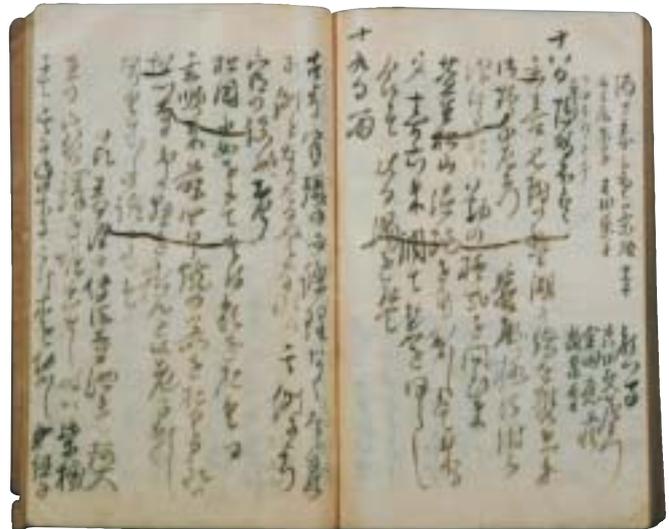
二月十八日

この日も、いろいろ来客があります。

・藩医の中村玄喜と、「見附の磐湖」が絵を持って来ます。「見附の磐湖」とは福田半香のことです。

「見附」とは、半香の生まれた遠江国の見附宿（現在の静岡県磐田市）のことで、「磐湖」は、磐田と近くの湖から、そう号していたようです。天保元年（一八三〇）頃から半香の号を用いたと言いますから、この『全楽堂日録』を書いていた天保四年（一八三三）は、すでに半香と号していたはずで、華山を訪ねるのが天保四年ですから、この日が半香との運命的な出会いの日だったのかもしれませんが、この日も、華山の自刃の原因となる蟄居中の書画会を企画するのが半香だったからです。

・佐野千左衛門が友信の子・伯太郎の御付を仰せつかったので、勤めの格式を聞きに来ます。
・萱生松山が自分で作ったうどんを持って来ます。



松山は、藩医である萱生玄順の養子です。夕方、鈴木喜六が来ます。「調て箸を回うし食す」とありますので、松山が持って来たうどんを一緒に食べたのでしょうか。

この日は、「湯を焚く」と風呂をわかった記述もあります。

十九日

「古より官職の御條理なく、たゞ自然に例となりたるのミなれば、其例により官の設を考」と、新しい官職を設置し、藩政を改革していこうとす

る華山の考えがうかがえる記述が見られます。

この日は、松岡貢（『全楽堂記伝』を著した松岡次郎の養父）がそば粉を送ってきます。また、萱生玄順が藤四郎焼の器を持って来ます。

藤四郎焼とは、鎌倉時代の陶工加藤景正（通称は四郎左衛門）が始めた焼き物のことです。今の瀬戸焼です。松本寺（神戸町カタセ）が華山に絵をかいてもらおうと、玄順に頼んで送ってきたものです。絵の依頼なので、単なる日用雑器ではないと思われる。

玄順といろいろな話をします。そこで話題となったのが、谷ノ口から出土した銅鐸のことです。

渥美半島の銅鐸については、『田原町史』（上巻五十二ページ）に、「渥美町村松、田原町谷ノ口から出土した記録があり、西神戸堀山田から出土している。東観音寺に残欠が保管されているのをいれると六個が出土したことになる。弥生時代の大遺跡が少ないのに比して、銅鐸・銅鍬などの青銅器文化が発展していたことはこの時期の渥美半島の特徴といえよう。」とあります。

華山は、谷ノ口出土の銅鐸について、「（空字）の頃、青津の伝法寺池にて阿大王の宝鐸を掘り出し時ハ、紫檀にて其かねの下にうけ木を製し、紐にも貫きありしなり。その傍に髑髏ありしが、これを掘せしものわづらひたりとぞ。其木ハ又蘇

枋の木ともいふ。」と記します。

「阿大王」とは、阿育王のことで、古代インドにあったマウリア朝の第三代の王・アショーカ王（前三〇四〜前三三二）です。「阿大王の宝鐸」とは、銅鐸のことで、九世紀頃から、「仏教・阿育王（アショーカ王）に関連させて『寶鐸』と評価された」（千葉大学大学院人文社会科学研究所『人文社会科学研究』第二十一号・石橋茂登氏「銅鐸と寺院 出土後の扱いに関して」二〇一〇年九月http://www.shd.chiba-u.ac.jp/ghss/activity2/vol/kiyou/kiyou1009_15.pdf）ようです。

江戸時代はその姿から「蝸」と呼ばれ、明治以降、呼称が一般化した銅鐸ですが、後述するように、『御祐筆日記』は、スケッチはあるものの、「右之通成もの」「右之一ツ」「谷ノ口村ニ而掘出候品」「谷ノ口村ニ而掘出し候かな物」と具体的な名称が記していないことや、金五郎（後出）が「つり金よりのもの」と記していることに対し、華山が「阿大王の宝鐸」と記したことに興味を持っています。

前出の石橋氏の論文には、村松出土の銅鐸について、『三代実録』に「参河國獻銅鐸一・高三尺四寸。徑一尺四寸。於渥美郡村松山中獲之。或曰。是阿育王之寶鐸也。」という記載があることを紹介しています。（谷ノ口の銅鐸についても紹介し

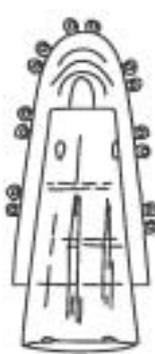
ています。）華山が『三代実録』に目を通していたことは十分に考えられます。

さて、出土した銅鐸ですが、『田原町史』（上巻六十七ページ）には、「寛政四年神戸村谷ノ口の用水池をつくる時に三個の銅鐸が発見されている。」とあり、寛政四年（一七九二）の『御祐筆日記』にその旨が記してあります。

『御祐筆日記』（『田原藩日記』第八卷一二二ページ）の寛政四年には、

・閏二月十七日

「谷ノ口ニ而井料有之候所、右之場所ニ而右之通成もの三ツ掘出候よし。



長サ三尺七寸

下虎口壹尺計

唐鉄ニても可有哉

代官前より届有之。右之一ツ今朝会所迄差出候。」

・閏二月十八日

「谷ノ口村ニ而掘出候品、今朝も式ツ会所江取寄有之。」

・閏二月二十二日

「谷ノ口村ニ而掘出し候かな物図面写し昨日之御便ニ遣之。尤内用書ニは不申遣、御年寄共用書ニ申遣之。」

二月十七日に谷ノ口で銅鐸が三つ見つかり、藩主に届け出た記述があります。

また、『田原町史』（上巻六十八ページ）は、

「閏二月十七日

谷ノ口村溜池掘りつり金よりのもの三つほり出し天王様方御道具釜竈とも知れ申さず候。その目九貫十貫長さ三尺、巾一尺、丸さ三尺五六寸位今日ご城内荷ないこみ申 野田人足掘り出す。」

と、人足の世話もしていた野田村の質屋金五郎の日記にも、この銅鐸の出土が記述されている（）とを紹介しています。

『田原町史』（上巻六十八ページ）によると、『渥美郡史』にも、「一、総高三尺四寸、鐸身高二尺五寸、上部鰭（高）八寸七分、左右鰭（巾）一寸四分（下部）口の周囲四尺余厚二分、目方九貫目 二、総高三尺五分、鐸身高二尺四寸五分、上部鰭（高）六寸、左右鰭（巾）二寸（下部）口の周囲二尺九寸、厚三分、目方八貫目 三、鐸身高八寸六分、口径六寸五分」と銅鐸についての記述があるそうです。なお、銅鐸の行方についても同書（同ページ）には、「かくして藩の庫にでも収納されたが、時がたつていつの間にか姿を消すことになったものである。」とあります。

（続）

研究員 柴田雅芳

財団法人華山会から
田原市博物館
のご案内

企画展のご案内

八月十一日(土)～九月二十三日(日)

夏の企画展 出光美術館コレクションによる花鳥の美く珠玉の日本・東洋美術

(企画展示室一・二)

花鳥は、日本・東洋の美術作品の中で、最も愛された主題です。出光美術館コレクションから絵画・工芸の優品を厳選し、展示します。

伝雪舟等楊筆四季花鳥図屏風、重要美術品金欄手孔雀文共蓋仙蓋瓶など。詳細はチラシ等でお知らせします。13ページに作品解説等を掲載しました。

同時開催：愛知県美術館サテライト展示(特別展示室)

九月二十九日(土)～十一月十一日(日)

秋の企画展 再発見 日本の書画の楽しみ暮らしに息づく山形・長谷川コレクション

(企画展示室一・二)

江戸時代初期から続く長谷川家は

与謝蕪村や谷文晁・渡辺華山作品を所蔵していた山形の旧家で、富岡鉄斎などの近代の画家を後援し、文人画や俳画を中心に書画を積極的に収集しました。未公開作品を含む約80点で日本の書画の楽しみを再発見します。

講演会(十月十一日予定)・展示解説

詳細はチラシ等でお知らせします。

同時開催：文人画を中心に、彭城百川・岡田半江・帆足杏雨・渡辺華山(特別展示室)

平常展のご案内

四月十四日(土)～五月二十七日(日)

渡辺華山の肖像画

華山筆竹中元真像、おなじみの鷹見泉石像・佐藤一斎像・市河米庵像なども複製で展示。



華山筆竹中元真像 個人蔵

新収蔵品お披露目します

近年収集した掛軸や絵画などを初公開します。



白井烟崑筆粧谿

第12回日展出品豊橋鉄道(株)寄贈

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。七月は休館します。渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

夏・秋の企画展 一般五〇〇円(四〇〇円)

企画展開催時は小・中学生無料

平常時

一般 二二〇円(二六〇円)

小・中学生 一〇〇円(八〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金

休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中
入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館
展覧会・催し物のお知らせ
見学会に参加できます。
博物館日より(年3回)・華山会報をお送りします。

華山会報 第二十八号

平成二十四年四月十一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事 白井孝市

常務理事 菰田稀一

事務局 讚岐俊宣

〒四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江二の二

TEL 〇五三―二二一―一七〇〇

FAX 〇五三―二二一―一七〇一

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 山田哲男

吉川利明 林 和彦

別所興一 加藤克己

林 哲志 中村正子

小川金一 柴田雅芳

中神昌秀 増山禎之

磯部奈三子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定 平成二十四年十一月一日